

昭和 10 年代「特異児童作品展」と同時代の「能力」言説一試論

A study on the exhibition of works of art by “Tokui- jidou(“idiosyncratic” children)” in the Showa 10s society in Japan

大内 郁
OOUCHI Kaoru

要旨 昭和 10 年代に、知的障害児養護施設八幡学園の子どもたちの作品を「特異児童」の作品として世に問う展覧会「特異児童作品展」が開催された。本論では、この展覧会が発信していた中心的テーマに障害者の「能力」という問題があったことを読み取り、その「能力」にまつわる関心・欲望が当時どのような社会的側面と関わり合うものであったかを次の二点に注目して解明しようとするものである。一つには、「特異児童作品展」の報道記事や反響的議論において「特異児童」の「能力」が論じられていくが、それは、同時代の社会的な優生議論と切り離せない関連性を有していたという点である。もう一つには、そのような「能力」への関心・欲望が、それに先行して昭和 10 年頃までに社会一般に定着していた「天才狂人説」や、「狂人の絵画」といった通俗的好奇心を継承し土台としていたと考えられるという点である。

1. 研究の背景

昭和 13 年の 11 月に、早稲田大学講師であった戸川行男の主導によって、千葉・市川の「精神薄弱児養護施設」八幡学園の子どもたちの作品展となる「特異児童労作作品展」が早稲田大学大隈小講堂にて開催された¹⁾。その反響をうけて、翌年、美術雑誌出版社のみづゑ・春鳥会が主催となって「特異児童作品展」が銀座の画廊・青樹社で開催された。これらの一連の展覧会の中で、特に注目を浴びたのが、清少年つまり山下清の貼絵作品であった。昭和 14 年 12 月 8 日から 12 日までの 5 日間、青樹社で開催された「特異児童作品展」には、2 万人近くの観客が集まったと記録され²⁾、有名画家や評論家も多く足を運んだ様子がある。この展覧会に合わせて『みづゑ』から発行された作品集も人気を呼び、版を重ねている³⁾。安井曾太郎が選画に携わったこの作品集のうちの大半の掲載作品が、山下清による貼絵作品であったことや、展覧会後の、『みづゑ』をはじめとする雑誌などでの反響も、清少年の作品に集中するかたちで起ったことから、事実上、山下清の作品が世間を

¹⁾ 戸川行男『特異児童』（目黒書店、昭和 15 年）によると、戸川は学園の教育方針に共感し八幡学園に出入りしていた。それと同時に自身の心理学分野の研究・調査の目的をもって通っていたということもいえるだろう。昭和 11 年に、清らの貼紙絵等の創作物の秀逸なものを、「一技能に優秀な精神薄弱児の臨床例」（赤松保羅、内田勇三郎との共同研究）（『哲学年誌』早稲田大学文学部編第 6 巻 1936 年）として発表を行っており、展覧会の開催に至る下地をつくっている。尚、現在の学園の名称は、「知的障害児施設」八幡学園である。

²⁾ 『みづゑ』昭和 15 年 1 月号「編集後記」に「5 日間で二万人近くの入場者があつたことは銀座始つて以来の記録で主催者として望外の喜びです」との記述がある。

³⁾ 『特異児童作品集』（みづゑ春鳥会、昭和 14 年）は、昭和 15 年発行の第三版まで確認できる。

賑わした話題であったということが出来る。昭和10年代の「特異児童作品展」の反響として、とりわけ注目されてきたのは、展覧会後、『みづゑ』昭和15年1月号に掲載された座談会「特異児童の作品座談会」である。銀座での会期終了後に収録されたこの座談会は、画家の伊原宇三郎、伊藤廉、梅原龍三郎、藤島武二、安井曾太郎、川端龍子、美術批評家の荒城季夫、学者の谷川徹三、関係者として戸川行男とみづゑ編集長の大下正男が出席をしたもので、当時を代表する美術関係者が集まったものだった。ここでの議論は、やはり山下清による貼絵作品を念頭になされ、清少年の紙貼絵作品の「芸術性をどう評価するか」が問われたこと、そして「清君は天才か非天才か」という応酬となったものとして⁴⁾、一時的にはあれ、大きな注目を集めたことは間違いないものであった。

しかしこの出来事は、当時の日本の画家や評論家が、自らは「美術」の枠組にしながらも、「もう一つの美術⁵⁾」として、八幡学園の山下清らの作品を評価するような、例えば、日本で1990年代に入り顕著になり始めた動向への道筋を作った出来事というわけではなかった。むしろここでは、大衆的な人気を博した様子と、企画者の戸川行男らが八幡学園の子どもたちの絵に惚れ込んでいった感覚と、美術界の評価や評論とがそれぞれにすれ違う、いくつもの不協和音が発せられていった姿が顕になっているといっても過言ではない。昭和15年に、小林秀雄が『文藝春秋』に「清君の紙貼絵」を書き、「清少年」の作品を称賛することにひそむ「欺瞞」の指摘を試みた強気な評論⁶⁾を発表した頃を境にして、展覧会の興奮は終息に向かっている様子が見受けられる。

戦後1950年代後半に放浪画家として本格的に有名になる山下清であるが、彼のこういった戦前の「発見」の出来事、昭和13、14年に開催された「特異児童作品展」について、これまでも山下清の人や作品が論じられる際に繰り返しそのことに触れられてはきた⁷⁾。しかし、当時の美術界でのいかなる影響があったのか、あるいは日本の近代美術においてどのような位置を占めるのか、といったことをめぐる詳細な検討は近年になってようやく行われてきている。村上博司氏による論稿「自己イメージの弁証法（上）—松本竣介《画家の像》、《五人》《三人》の解説—」（『美術研究』383号、平成16年8月）⁸⁾は、研究主眼を画家松本竣介の『立てる像』の作品解釈に置く中で、その制作に重要な影響を与えたものとして昭和14年の「特異児童作品展」を見出し、展覧会の反響の様相を追っている。この村上氏の論では、画家松本竣介自身が自らの過去の病気体験から、「知能の喪失」へのトラウマを持っていることや、その反動としての「理性」への信奉から、当時「低能児」とされた清の作品が、「天才」として賞賛されることを心理的に拒絶し、昭和15年、『みづゑ』に「特異児童の作品」座談会が掲載された直後に書いた文章「アバンギャルドの尻尾」と「黒い花」で、松本竣介が清少年の絵を否定していることが指摘された。

⁴⁾ 三頭谷『宿命の画天使たち山下清・沼祐一・他』（美学出版2008年）p. 76

⁵⁾ 三頭谷前掲書 p. 102

⁶⁾ 小林秀雄「清君の紙貼絵」『文藝春秋』昭和15年2月

⁷⁾ 素朴派という文脈における初期の論考、遠藤望「日本近代美術と素朴な画家たち」世田谷美術館『芸術と素朴』展カタログ（世田谷美術館1986年）所収等を初期のものとして、近年アウトサイダー・アートの文脈での日本での歴史を考察した、服部正『アウトサイダー・アート』（光文社2003年）などまで、その事実確認は繰り返し行われている。

⁸⁾ 村上博司「自己イメージの弁証法（上）—松本竣介《画家の像》、《五人》《三人》の解説—」『美術研究』383号（平成16年8月）

また、三頭谷鷹史氏による著書『宿命の画天使たち山下清・沼祐一・他』（美学出版2008年）は、日本での「近代美術史の欠落部分」という問題意識を持った上で、「知的障害と美術」の足跡をたどる作業として、戦前の八幡学園の教育方針、山下清や山下に限らず独創的な子どもたちの作品創作、そして「特異児童作品展」の開催といったものそれぞれを具体的に再検討し、それらが有機的な結びつきをもっている全体像を示したものであるが、そこでは当然「特異児童作品展」後に起った反響の様相も重要な考察対象となっており、同じく『みづゑ』誌上座談会の議論やその他の批評や報道などにおいて主だった議論が紹介されている。特に小林秀雄らに見られた「清作品への賞賛」への批判的言説については、それらが一貫した論理に基づいたものというより、近代日本のモダニストとしての彼らが規範とすべき西洋美術以外の「美術」を受け止めることができなかつた姿として捉えている。

これらの研究によって、昭和10年代の「特異児童作品展」が、日本の近・現代美術との関係において、見過ごせない感情的な亀裂をもそこにもっていることが確認されたと言えるだろう。しかしながら、それらがより深部において解明されるための準備は、未だ充分には行われていない。というのも、「特異児童作品展」当時を顧みた時、そこに破格の数の顧客が訪れていたという事実が、何を意味しているかの検討が行われていないのだ。言い換えると、「特異児童」という存在を、同時代的な社会背景との緊張関係や、大衆的関心領域との関わりで捉える議論が未だ行われてはいないといえる。本論は、先行研究が明らかにした「特異児童作品展」後の美術界における表層的側面での反響の様子をふまえながら、その議論を少し立ち戻らせて、「特異児童作品展」が当時の社会的・政治的影響関係においてどのような場所に位置しており、大衆的な関心の深部に関わってどのような通俗的好奇心に支えられていたのかを探ることに主眼を置くものである。翻ってここでの課題は、今日考えられる広い意味での「マイノリティ」が「表現すること」が、いかに、「純粋な作品」という場を確保しえず存在してきたかということにおいて、具体的な歴史的検討ともなる可能性を考えている⁹⁾。

2. 「特異児童作品」と「能力」をめぐる関心・欲望

2-1 作品展覧会と啓蒙展覧会のあいだ

銀座・青樹社での展覧会5日間で約2万人もの観客があったということは、そもそも規模の小さな展覧会として驚くべきことである。この展覧会の企画者側の意図にもまして、人々がそこに集まった理由とは何であったのかということも、「特異児童作品展」の反響における深層として考えてみたい。ここでまず問いたいのは、この作品展が、「美術作品として」という以上に、「精神薄弱児」という存在の紹介として発信され、受容されたのではないかという問題である。

手がかりとして取り上げたいのが、昭和13年から14年の、展覧会前後の関連する新聞記事である。昭和13年11月の早稲田大学大隈小講堂での「特異児童労作作品展」を事前に報道する記事として、東京朝日新聞昭和13年11月10日家庭欄「特異児童の自由画や

⁹⁾ 宇野邦一・野谷文昭『マイノリティは創造する』（せりか書房2001年）序文において、マイノリティが表現することにおける「政治性」について宇野による明解な指摘がある。

木工品展「精神薄弱者の教育資料」がある。この記事は、この展覧会を作品展であると同時に「精神薄弱児養護教育」の啓蒙的展覧会¹⁰⁾という性格のもとで世間一般に向けて紹介したものとなるだろう。記事の中央部には、山下清の作品、百合の花を描いた貼絵作品が載せてあり、目をひく効果があるが、開催の趣旨や記事の内容を読むと、ひとまず見出しにあるように「精神薄弱者の教育資料」の紹介としてのものと見受けられる。次のように書かれる。

趣旨は全国に五十萬と称せられるこの種児童のうちには知能の劣等といふのでなく寧ろ特異性が強いため一般児童とは揆を一にしない事が判り、この社会問題を解決するためこれ等児童を持つ親の考ふべき点を特異性児童の手になる作品を通して指示しようといふ試みである¹¹⁾。(傍線引用者)

「知能の劣等」ではなく「特異性が強い」ために、一般に適応しえない子どもがいるのだということ、八幡学園の子どもたちの作品を見せることで、特にそういった子どもの親へ知識を与えつつ広く世に知らせる目的をもった展覧会だということだ。続いて展覧会企画者の戸川の談話として、「精神薄弱の児童の中には、調べてみると極めて強い特異性をもったものがあり」、例えば木工で「勝れた」ものを、あるいは色紙で「素晴らしい」絵画や図案を作る児童があるということが紹介される。ここでの「特異」というのは、「知能の劣等」というマイナスイメージの転換としてポジティブに語られているものだということがわかる。作品評価としては、「勝れた」「素晴らしい」という抽象的な表現で称賛をあらわすことにとどまる。

早稲田大学大隈小講堂での作品展からおよそ一年後、昭和14年の銀座での展覧会案内記事が、同じく東京朝日新聞に取り上げられる。昭和14年12月6日東京朝日新聞の趣味欄で「画壇人さへ驚く／藝術味豊かな作品／八日から開く／特殊児童の絵画展」と見出しをつけたものだ。まず見出しでは、「画壇人が驚いた藝術味豊かな作品」と書かれ、作品として玄人が驚くような芸術性をもっていることが伝えられる。

特殊児童作品展¹²⁾と云ふのだがこれを已に下見した洋画壇の鬼才安井曾太郎画伯を始め常に新しい表現と感覚を求めてゐる画壇人達は「ウム」と唸つて感嘆し、中には「何の為の今までの画業行ぞ、今日限り画家稼業を止める」と決意する者まで出てくるといふ正に洋画壇にとつて青天霹靂の出来事である¹³⁾—

八幡学園の子どもたちの作品は、「常に新しい表現と感覚を求めている画壇人達」を感

¹⁰⁾ 啓蒙展覧会については、田中聡『衛生展覧会の欲望』（青弓社1994年）に詳しいが、総じて、明治以降の「衛生」の思想を背景にもち、科学的医学的に「排除すべき」病気等の知識を伝えるための展覧会といえる。

¹¹⁾ 東京朝日新聞昭和13年11月10日家庭欄「特異児童の自由画や木工品展／精神薄弱者の教育資料」

¹²⁾ 展覧会名は、「特異児童作品展」であったが、ここでは「特殊」と報じられている。

¹³⁾ 東京朝日新聞昭和14年12月6日東京朝日新聞「画壇人さへ驚く／藝術味豊かな作品／八日から開く／特殊児童の絵画展」

嘆させるものであったとし、特に洋画家たちに刺激を与え揺るがす驚きの出来事だったと書かれる。ここでは、芸術における前衛性とアウトサイダーの表現の出会いを示唆する様子もあり、「美術」としての新しい領域開拓の可能性が意識されている様子もある。しかし、続いての記述は、この特異児童が現実的にいかに社会的アウトサイダーであるかということ、またそれにもかかわらず八幡学園での生活によって彼らの才能がどれほど開花していったか、ということ的印象づけるものである。

特殊児童とは云ひ代へれば実は低能児の事なのだが、これ等の作品は市川市八幡にある特殊児童学校八幡学園の収容児の作品なのである。／特殊児童として両親からも世間からも厄介者扱ひされて手のつけ様もなかった無能力者も、この学園の暖かいホームに収容され適当に指導を受けてゐる中に、今まで人にも知れなかつた才能が引き出されて来るのである。

社会でも家庭でも「厄介者の扱い」を受けていた「低能児」とされる子どもたちが、学園で適切な指導を受けることによって、才能が引き出されていったのだと伝えられる。続けて、今回出品の大部分を占める作者の清少年は実は18歳であるが「尋常小学校2,3年生の知能」であること、それにも関わらず彼の貼紙絵が西洋の印象派の手法や、色遣いではゴッホの色感を思わせ、瑞々しく新鮮に人々に受けとめられたといったことが伝えられる。最後に、「同展は藝術的に鑑賞してもまた特殊児童につながりを持つ人々にも一條の希望を与へずにはおかぬ大きな示唆を持ったものであらう」とまとめ、彼らの作品のもつ芸術的な驚きとともに、そのことが「障害」をもつ児童を身近にもつ人に希望を与えるものとして、全体として「能力」の開花に引き寄せられて語られており、その意味での福祉・教育的な啓蒙がこの話題で重要な目的をもっていることが見受けられる。

展覧会会期中に書かれた紹介記事では、ほかに昭和14年12月9日読売新聞学芸欄に美術批評家の柳亮による署名記事がある。この記事は、短く凝縮された表現によって、「特別な児童による驚くべき作品の登場」を読者に伝えるものとなっている。

精神薄弱児童に、特殊な技芸教育を施してゐる千葉の八幡学園の園児の作が、みづゑ社の主催で銀座の青樹社に展覧されてゐるが、近ごろ興味深い催しである。色紙を細く切つて張り合はせた、清といふ天才児童の貼絵など、安井曾太郎氏が激賞するだけあつて、駭くべき感覚であり独創力である¹⁴⁾。(傍線引用者)

この記事でまず気になるのは、「特殊な技芸教育を施してゐる八幡学園」という表現であろう。具体的な記述ではないので、「八幡学園では、精神薄弱児に技芸への特別な教育活動」が行われているという情報がインプットされる¹⁵⁾。そこで輩出されたのが「清という天才児童」であつて、彼の貼絵が驚くべきものであること、それを有名画家の安井曾太

¹⁴⁾ 柳亮「特異児童作品展／八日-十二日銀座青樹社」昭和14年12月9日読売新聞学芸欄

¹⁵⁾ 戸川前掲書 p. 1 では、このような報道が、焦点を外れた期待を一般に生んだことを伝えている。「特異児童とは絵のうまい子だと早合点した者もあり、一方特異児の親御さん達は此の画集の学校にいれさへすれば子供が必ず名人になれると考へたらしい」と学園に問合せが殺到した様子を記している。

郎氏が絶賛したということがお墨付として伝えられる。

同じ読売新聞で、展覧会終了後の昭和14年12月13日、今度は婦人欄に紙面4分の1ほどを使った比較的大きな特集記事で、「普通児に勝る美的能力 特異児童の導き方 はめ込み主義では失敗」との見出しである。記事中央部に山下清による自画像の貼絵が載ったこの記事は、戸川行男への聞き取りの記事となっており、ほぼ、教育的観点からの啓蒙の記事といえるだろう。冒頭、「低能児といはれている特異児童の作品展覧会が早大と銀座の青樹社画廊で開かれ、一流画人を始め世間の大人たちをアッと驚かせました。」という報告をした上で、「低能児は全国七、八十萬にのぼり、人的資源の拡充強化の観点から最近その養護問題が真剣に叫ばれてゐますが」というように時局的な養護問題を背景にしなが、数的な実態などが書き出され、「低能児」の概説として、医学面や心理面、行動特徴などをのせる。また、「低能児」とされる彼らへの指導例として、八幡学園での貼絵や木工細工等の教育的効果を伝え、それらを行う留意点として、彼らをも一つの型にはめ込もうとしたり、強制することが逆効果となることなどのアドバイスが書かれている。

展覧会後の同日13日、作家の壺井栄が東京朝日に書いた文章も、彼ら「低能児」の作品への驚きと同時に、むしろ、彼らに対する保護、教育的な成果の側面が尊ばれながら、この展覧会が共感・支持を集めている様子がよくあらわれている。昭和14年12月13日の東京朝日新聞家庭欄に載った女性の声シリーズの記事、壺井栄「特殊児童の作品」は、「低能児」とされる「レベル以下の智能しか持たない児童」は想像以上の数に上るのではないか、という書き出しで始まり、「精神に欠陥のある子供たち」は人々の抑圧や嘲笑の中に身をさらし、その親の中では我が子を捨て猫のようになげやりにするものさえ出てくると「低能児」の実情を憂慮した上で、先の八幡学園の展覧会について次のようにレポートしている。

其鋭い色感、藝術味豊かな多くの作品に接してこれが頭の鈍い子の作品であらうかと人々を瞠目させ、さまざまの感嘆の声をあげさせてゐる¹⁶⁾。(傍線引用者)

このように、彼らの作品がいわゆるステレオタイプの「低能児」イメージを変革するという驚きの様子を伝えている。しかしながら、これらの「痴愚の子供が大人の遠く及ばない作品を創り出した」ということはもとより、考えるべきより大きな問題は、社会からも家庭からも締め出されてしまったこれらの子どもを守り育て、それぞれの持前のものを引き出す環境に置き、見出されずに終るかもしれなかった才能を生かし得たことの驚異である、と書き、これを記事として伝える意義は、八幡学園のような養護施設の拡充などにつながる問題を提起させるところにあるとする考えを示している。

こういった主要新聞での一連の展覧会の報道をみると、美術界の作家たちを驚かす稀な才能として「特異児童作品」の出現を伝えることと、「精神薄弱児養護問題」という福祉への関心喚起とが混在しているが、実質的には、「精神薄弱児養護問題」の関心喚起の比重が高いという印象をうける。

さらにこのことを、違う視点から確認するものとして、昭和13年末の「特異児童労作

¹⁶⁾ 壺井栄「特殊児童の作品」昭和14年12月13日の東京朝日新聞家庭欄「女性の声」

作品展」と一年後の「特異児童作品展」の間の時期に開催された、大阪朝日新聞社会事業団主催による「精神薄弱児童養護展覧会」に簡単にだが触れたい。これは初期社会事業施設の多くが集結した展覧会となっており、八幡学園も参加している。先行の三頭谷氏の論稿では、この展覧会が大隈小講堂での展覧会と同様の展覧会として「様々な養護施設と特別学級までもが参加した大規模な展覧会となった¹⁷⁾。」とだけ触れられているが、この展覧会のあり方は、作品展覧会とは大いに異なるもので、まさにこの展覧会の記録冊子の挨拶が「精神薄弱児童養護の問題は児童福祉の上からは言ふまでもなく、民族衛生の見地からもその保護対策確立は極めて重要な国家的問題と申すべく、殊に新東亜の大理想のため躍進途上の我国として、痛切にその問題解決の必要を感じます¹⁸⁾」と伝えているように、民族優生を基本理念におく中での「精神薄弱児童」の知識強化と情報周知の啓蒙展覧会なのである。しかし、ここに八幡学園から出品された内容は、ほぼ特異児童作品展で展示された作品と重なっているものであると考えられ、たとえば、そこには山下清の貼絵作品などが所狭しと展示されている様子が記録されている¹⁹⁾。ここで展覧された八幡学園の子どもたちの作品は、「精神薄弱児」教育資料としての存在意義を明確にもっていたわけである²⁰⁾。

2-2 人的資源議論を背景にみる「特異児童作品展」

そういった、「精神薄弱児養護」の関心喚起を、国家的な要請としての「人的資源」議論を背景にみることで、さらに、当時の「特異児童作品」を取り巻く社会的状況として、「能力」への求心の高まりがあったことを考えてみたい。

前述の昭和14年の「特異児童展覧会」後に出された画集『特異児童作品集』において、八幡学園園長の久保寺保久が割り当てられた紙面で積極的に語っているのが、障害者の救護と福祉充実への願いとともに、障害者が「役立ちうる」ということであった。一部を引用してみたい。

一体、精神薄弱児、俗に所謂、低能児の療護教導を要望します理由は、第一に、軽度の精神薄弱者はもとより国防上にも産業上にも役立ち得るのですが比較的重い度合の者でも何が一事に達成し役立つものです。従って彼等にも訓練、教養の機会を與へるべきです。次にかうした子供をもった家庭の苦悩、両親の愁訴に対しては適切に子供を処置することが当然の国家的責務であり、かかる療護機関にありてこそ国民精神健康度の高い標識となりうるのです。假令近き将来に断種や絶産の民族衛生的方策が法律化するとしましても是等児童の処置問題は不断に考究されねばなりません²¹⁾。

¹⁷⁾ 三頭谷前掲書 p. 57

¹⁸⁾ 『知的・身体障害者問題資料集成（戦前編）第13巻』不二出版2006、「精神薄弱児童擁護展覧会概要」p. 94

¹⁹⁾ 前掲『知的・身体障害者問題資料集成（戦前編）第13巻』「精神薄弱児童擁護展覧会概要」p. 105

²⁰⁾ 服部正氏は『アウトサイダー・アート』（光文社新書2003年）において、日本のアウトサイダー・アートの特徴として、戦後、山下清をプロデュースした式場隆三郎との関連において「福祉・教育」分野での発展を結びつけたが、このことは明らかに戦前のこの時期に既に前例として起こっていたことといえよう。

ここにわかるように、久保寺は、学園の子どもたちの作品の成果を背景としながら、「精神薄弱児」は国防上にも産業上にも役立つのだと強調し、また重度の障害者も何かを達成し役立つものだ、と論じる。そういった彼らに対し、国家的責任として教育の機会を与えるべきだということを述べているのだ²²⁾。ここで久保寺が意識しているのは、当時、国家総動員法の成立を背景に、具体化されようとしていた「人的資源」の議論であることは明らかである。

周知のとおり、大隈小講堂で「特異児童労作作品展」が開催された年、昭和13年（1938年）の4月には「国家総動員法」が公布されている。「国家総動員トハ戦時ニ際シ国防目的達成ノ為国ノ全力ヲ最モ有効ニ發揮セシムル様人的及物的資源ヲ統制運用スルヲ謂フ」とする第一条のなかで、「人的な資源」という文言が出されたものをめぐり、具体的な民族優生の議論が行われているのだ。例えば、昭和14年には、国家総動員法制定に合わせて美濃口時次郎という、当時企画院に所属していた人口問題などを扱う学者が『人的資源論』を著した中に次のような箇所がある。

現下の日本に就いて人的資源の問題として考究せられなければならない最も緊要なる問題は、如何にして優秀なる国防力としての人的資源と、新たなる産業の要求に適応したる人的資源とを確保するかといふ問題に帰着することになると思ふ。／単なる人口は直ちにそのすべてを以て一国社会の人的資源を構成すると見ることは出来ない。人口が一国社会の人的資源となるためには、／その人口が立派に国防力、または労働力として活動し得るだけの体資を具へてゐなければならない。病人や廢疾者や白痴や精神病者などですでに肉体的に国防力または労働力として活動し得るだけの能力を備へてゐない者は勿論其の国社会の人的資源と見做すことは出来ない。但し身体が強健であるといふだけでは人的資源としては尚ほ不十分である。其の肉体的に強健なものが一国社会の人的資源となるためには、／健全なる精神と其の社会が必要とする技術的能力とを具へてゐるといふことが、人的資源の絶対的必要条件でなければならない。而してこの健全なる肉体と精神と、さらに其の社会が要求する技術的能力とを賦与することが即ち教育の任務でなければならないと思ふ。（傍線引用者）²³⁾

ここで言われる「人的資源」としての国民の像は、「強健な肉体」、「立派な道徳的資質」、「労働にふさわしい技術的な能力」をもつものとされ、同時に、それと対比される形で、病者や障害者が具体的に「人的資源ではない」と烙印されている。「病人や廢疾者や白痴や精神病者などですでに肉体的に国防力または労働力として活動し得るだけの能力を備へてゐない者は勿論其の国社会の人的資源と見做すことは出来ない」のである。また教育という場面においては、「人的資源となる能力」を付与していくことが求められているようすがわかる。

²¹⁾ 久保寺保久「園児作品集の出版に方りて」『特異児童作品集』昭和14年春鳥会 p. 3

²²⁾ 平田勝政「戦前日本における優生学の知的障害者福祉分野への影響に関する歴史的研究」長崎大学教育学部紀要第60号（2001年3月）などで、既に、久保寺を含む先見的社会事業者たちの多くが「優生思想」を取り入れ、その上での福祉行政の拡充要求を想定していたことが明らかにされている。

²³⁾ 美濃口時次郎前掲書 p. 211

こういった「能力主義」が打ち出された国家的、社会的要請への応答が「特異児童作品展」の開催意図に入り込んでいたということは即座に言うことはできないが、先の久保寺の議論や、新聞報道で、「劣等」ではなく「特異な能力」なのだと紹介された「特異児童作品展」の話題は、「人的資源」議論に寄り添い応答するかのようになり、彼らの「能力」の発揮として情報発信されてもいるのである。しかし、それにしても、ここでの「能力」とは曖昧なものである。それは、芸術的素質の評価としての「才能」とあいまいに渾然一体となった形での、極めて政治的な、「客観的、科学的」な「能力」概念がここで発生しているからであろう。このことは、同時に、「特異児童作品」において、純粋な作品鑑賞とは異なるダイナミックな効果を当時の社会に生む可能性にもつながっていったらう。それらは企画者の意図を超えて、いわゆる「低能」や「劣等」として流布された障害者を囲うイメージを揺さぶるものとしての期待を背負うものであったとも考えられる。

3. 「能力」にまつわる好奇心—「天才と狂人は紙一重」、イデオ・サヴァン

精神分析学者大槻憲二が昭和16年11月の『精神と科学』誌に載せた「国民優生法の建て直し」は、文字通り、昭和15年に制定された「国民優生法」の改正を求めた論稿である。大槻は、「断種法（優生法）が専ら遺伝学にのみ準拠することには危険と不備がある。社会学や心理学にも準拠すべきである。人間は先天的遺伝よりもむしろ後天的条件によってその人の能不能が決定される部分が多いと考える。」と主張し、「ただ遺伝と云ふことを機械的に、形式的に考えて、優生的家族だの劣性的家族だのと、レッテルをはりつけるやうにして断種すべきか否かを決定するのは、あまりに単純な物の考え方ではないだろうか。」との結論を出した後に、その理由を裏付ける事例として、「天才と狂人は紙一重」を常識論として提示したうえで、山下清と思われる一例を挙げている。

現に天才と狂人とは紙一重の差がと云ふような常識論もあり、また現に天才者にして発狂してゐるものも数多いことだし、／更にまた異常児、低能児の内に絵画上の天才のあることが最近も実証せられた—（略）²⁴⁾

この場面では、優生断種という、人的資源論とも連なる戦時下の民族優生議論のたかまりに準じて起った議論への具体的な反証として、「異常児」、「低能児」の内に「絵画上の天才」の出現が言われているのだ²⁵⁾。このような現象はただ、瑣末な一事象なのであるか。それが意識的か無意識的に関わらず、このような価値の「揺らぎ」の存在として、「特異児童」とは時代的な要請を担っていたのではないかという事が考えられるのである。さらには、そのことに関わり、「特異児童」が大衆的関心の対象となった背景として、「特異児童作品展」が、大槻の言説にもあらわれた「天才と狂人は紙一重」という表現で、通

²⁴⁾ 大槻憲二「国民優生法の建て直し」『精神と科学』昭和16年11月号

²⁵⁾ もちろん、この意味で、山下の「天才」が否定されたものもある。杉田直樹「天才と才能」『藝術方法論』（河出書房昭和15年）p. 82において、杉田は、「真の天才的藝術家には末梢的技能よりも智能による調和と独創的表現とが最も必要なる要素である以上、低能者では到底天才たることは出来ない」と述べ、山下清の「天才」論の不可能性を示した。

俗的な「異常性」「特別性」と「創造性」との接合面にまつわる好奇心をくすぐっていたことを見てみたい。このことは、後述する「狂人の絵画」などの話題と関心の根を共有しているのである。

西洋近代のロマンチズムが成り立たせてきた「天才狂人説」が、より広く大衆的に広まったのが、1864年にイタリアの精神病理学者ロンブローゾが著した『天才と狂人』を代表とする、アイロニカルでありながら「医学・科学性」を帯びた天才観、「天才と狂人は紙一重」であるが²⁶⁾、このロンブローゾ研究の日本での受容については、岡田温司氏が、明治以降の教育、精神医学などのアカデミックな領域での言説や、文学、芸術論をまたにかけて、継続的に受容されてきた様子を指摘し、そういった紋切り型の「科学」的な対象分析への興味が無意識的に人々に影響を与えていることを論じている²⁷⁾。

「特異児童作品展」の大衆的な支持を考えると、そこに、このような「特殊な存在」に注目していくロンブローゾ的な「アブノーマルな表現」への関心との影響関係を捉えることができるのではないだろうか。例えば、「特異児童作品展」においては中心的役割を担わなかったものの、同時期に八幡学園の顧問医となっていた精神科医の式場隆三郎が、昭和10年代までにマスメディアで発していった情報などを考えると²⁸⁾、「アブノーマルな人物」と稀な表現力との一体化への興味・関心、つまり、「精神疾患をもつ画家ゴッホ」や、「精神病患者の創作物」といった話題が、この「特異児童作品展」の前兆としても一面においては捉えられるべきなのではないだろうか。特に、「特異児童労作作品展」の前年、昭和12年には、式場が精神疾患の患者の建てた異建築「二笑亭」を詳細に記録した文章、『二笑亭綺譚』の2回の連載（11月、12月）が『中央公論』でなされており、読者からの反響が大きかったことが記されている²⁹⁾。こういった性格のニュースが、総じて「天才と狂人は紙一重」という概念にあてはめられながら、人々の興味をひいていたと考えられるのである。

「特異児童作品展」にまつわり、「天才と狂人は紙一重」という反応を示したものは、冒頭にあげたもののほかにも多く見られる。その代表的なものを挙げると、次のようなもの

²⁶⁾ アンヌ・E・ボウラー氏による、ヨーロッパにおける「狂人の芸術」領域の展開に関する論考（Anne E. Bowler “Asylum art: the social construction of an aesthetic category” *Outsider art: contesting boundaries in contemporary culture*, edited by Vera L. Zolberg and Joni Maya Cherbo, University Press, Cambridge 1997）では、今日の「アウトサイダー・アート」の源流と考えられる H. プリンツホルンの研究書『精神病患者の絵画』にいたるまでの歴史的段階のなかで、ロンブローゾ研究の占める位置を、近代ロマンチズムの影響下にあるものの次の段階における、「狂気天才」という存在が、新興の科学分野である精神病理学を通じて存在論として「真実」の地位にまで高められるという意味で独特な時期の代表例として論じている。

²⁷⁾ 岡田温司『ミメシスを超えて—美術史の無意識を問う』（勁草書房 2000年）第一章「天才と狂気は紙一重」—ロンブローゾと日本—において、明治以降のロンブローゾ研究「天才狂人説」の継続的な受容の姿を、明治期の教育・哲学・精神医学系学術雑誌の中や富士川遊（初期精神医学者）や大正期『白樺』期の柳宗悦、あるいは夏目漱石などを例に挙げて論じている。

²⁸⁾ 拙論「日本における1920～30年代の H. プリンツホルン『精神病患者の芸術性』受容についての一考察」（千葉大学人文社会科学研究所第16号）において論じたように、式場隆三郎は、戦前日本での、「アブノーマル」な人物の表現の研究者として代表的な位置にいた。

²⁹⁾ 式場隆三郎「狂人の絵」『文藝春秋』昭和13年4月号 p. 352 冒頭に「狂画家ファン・ゴッホ研究に出発した私の芸術病理学は、昨年「二笑亭綺譚」に到達した。ゴッホは後期印象派の巨匠であるが、二笑亭主人は無名の一地主にすぎなかった。しかし、今もなほ生きてゐるこの稀有な病的建築家の分析は、ゴッホ以上の親しみが感じられるのか、反響は意外に大きかった。」と記す。

がある。一つ目に戦後のものであるが、田近憲三が戦前の山下清の登場を回想して書いた文は、「特異児童」発見時の興奮の雰囲気を読み取れる。

特異児童の藝術あらわる……奇蹟か、天才か、特異性格の特質か……日支事変のたけなわ頃、突如紹介された山下清君の切紙作品ほど、画壇をわきたたせた問題もなかつた³⁰⁾。

また、昭和14年4月『月刊民芸』誌で、民芸協会の田中豊太郎が書いたものには、清少年の紙貼絵への驚きを「天才と狂人は紙一重」だと指摘する様子とともに、式場隆三郎と結びつけられながら、彼らの作品が「アブノーマルな表現」と同じ領域にあるものとして推測されていることについても見ることができる。

最近見た雑誌で興味を惹いたのは「みづゑ」二月号に掲載された、低脳児の作った貼紙絵である。一見した時は恰もゴッホの絵かとさへ思つた。(中略)／貼紙絵は何も珍しくはないが、この程度までに生かした作品は実際稀だと思ふ。K・Y少年作の学園裏風景、田圃と鳥、昆虫、花魁草、野外映画館等は優れたものと見受けられた。(中略)／凡そ天才と気狂ひとは紙一重だとしても、この事実に直面しては、聊か啞然とするの外はなからう。／いづれも市川市に在る八幡学園に収容されている、低脳な子供達の作画なのである。恐らく式場君のお膝元であり、また同君の畠のものだから、研究の対象にもなつてゐやうが— (傍線引用者)³¹⁾

このように「特異児童」と精神科医の式場隆三郎とが結びつけられていく姿は、ここで触れられているような、当時式場自身が自負していた「アブノーマルな表現」との関わりにおける式場の独壇場的な面とのつながりからだけでなく、「精神薄弱」というものが、当時漠然とした「精神病」の範疇の中で扱われていたということからも推測できる。例えば、精神科医の式場らが昭和10年前後に「精神病者の絵画」について記すとき、そこには「躁病、抑鬱病、麻痺性痴呆、ヒステリー」らの「病名」と共に、常に「精神薄弱」という項目がある。つまり、当時「精神薄弱」という言葉が、実態に関わらずある種の「狂人」イメージをもっていたということがいえるのである。

さらに、「特異児童作品展」において、「天才狂人説」を喚起させる「天才」イメージを補った言葉として、心理学・精神医学分野の用語の「イディオ・サヴァン (idiot savan)」があったことを挙げたい。当時社会的影響力のあった式場に関して見たところ、例えば山下が「特異児童労作作品展」の時より引き合いにだされていたアンリ・ルソーとの類似点や、ルソーに付与されていた西洋美術的な用語としての「ナイーブ」や「プリミティブ」を戦前の山下清につけることはなかったのである。式場が最初に山下清について触れた記述と思われる、昭和13年4月の『文藝春秋』での「狂人の絵」の中の「精神薄弱」の項は次のようなものである。冒頭で、今日から見ると大きな偏見を含みながら当時の「精

³⁰⁾ 田近憲三「山下清の絵」『芸術新潮』昭和29年6月号 p. 80

³¹⁾ 田中豊太郎「身邊雑記」『月刊民芸』昭和14年4月号 p. 15

「精神薄弱」者の絵の見解を示した上で、後に一躍有名人となる「清」の存在を意識しながら書かれたと思われる記述には「白痴天才」という、「イディオ・サヴァン」を日本語化した名称が掲げられる。

精神薄弱

これは低能のことで、多くは先天的の知的発育制止である。その程度によって、白痴、痴愚、魯鈍に分たれてゐる。この患者は一般に制作能力の最も低いもので、白痴の如きは書字不能のことが多い。白痴の絵は断片的で、線に乏しく、構成力がない。中には線すら描くことが出来ず、単に色を雑然と塗りつけるにとどめるものがある。

（略）

しかし、時には精神薄弱でありながら、素晴らしい絵の描けるものがある。他の能力はまるで駄目だが、絵だけは常人以上に精細であり、豊かなものがある。かゝる患者に対しては、昔から白痴天才といふ名称が与へられた。（傍点引用者）³²⁾

このような式場らの提供していた「病的絵画」という話題は、主に「狂人の絵画」といったタイトルをつけながら、昭和10年前後に雑誌等で発表されていったもので、精神疾患の患者たちの創作物を症例別に紹介するものであった³³⁾。つまり、「特異児童作品展」以前に、こういった「狂人の絵画」、「病的絵画」が紹介される場面において、「精神薄弱」の絵画が既に論じられてきているのである。そのような意味で、「特異児童作品展」と「狂人の絵画」とは明白に関連づいてくると考えられるのである。

この白痴天才という名称や、「特異児童」という名称においても、本章の冒頭で触れた「ロンブローゾ」的要素が通低していることがわかる。つまり、この「白痴天才」にしろ「特異児童」にしろ、彼らの作品を論じる側にとっての第一義が、そのもの「白痴天才」「特異児童」という存在なのだ。この「白痴天才」と「特異児童」とは代替可能なものである。それらは作品的評価ではなく、発見されるべき存在である。展覧会を主導した戸川行男も当初からイディオ・サヴァンへの興味を隠してはいないのであり³⁴⁾、戸川行男や式場隆三郎は「特殊な存在」としてのイディオ・サヴァンを発見することにおいて、当時共通の関心をもっていたのだともいえる。この「白痴天才」=イディオ・サヴァンは、「精神薄弱」でありながら、秀でた「能力」をもつ人物を表す言葉である。その姿は、巷で馴染んでい「天才と狂人は紙一重」というイメージに重なり、結びついていくものであっただろう。

³²⁾ 式場隆三郎「狂人の絵」『文藝春秋』昭和13年4月号 p. 358

³³⁾ 式場の病的絵画論の中で、「精神薄弱」は、他の疾患に比べ、相対的に高い作品評価を得た様子はない。例えば、式場が清少年に出会ってから1年経た時点の昭和12年に出版する『精神病理学』（三笠書房）に収められた「精神病者の絵画及び筆跡」においても、「精神薄弱」の項では「模写すら完全には出来ないこの種の患者の絵画は、殆ど問題にならない」との記述が載るだけだ。式場を中心とした分析は、別に改めて論じる必要がある。

³⁴⁾ 戸川行男「八幡学園の子供たち」『特異児童作品集』春鳥社昭和14年所収。p. 11。ここで戸川は、イディオ・サヴァンの学術用語の説明をするとともに、断定はしないものの、この観点から八幡学園の子どもたちの作品を考える問題を提起している。

まとめにかえて

2、3章で論じたことを簡潔にまとめると、次のようなことがいえる。①、「特異児童作品展覧会」の報道等の情報発信、そして受容の場面では、まず、それが作品展であると同時に「精神薄弱児童」の啓蒙展であるという部分を否めない。②、そのことは、当時の社会的な優生議論における「能力主義」を反映するかのようになり、障害児の「能力」的な発揮として情報が発信されていったことにおいても確認できる。③、一方、その「特異児童」たちの作品は、大衆的には、ある種、存在として特異であるというような通俗的な「天才と狂人は紙一重」という好奇心と関わりながら受け止められていることが確認できる。④、その好奇心は時期的に前に起っている「狂人の絵画」といった話題とも通低するものだとし、それらとの連関の可能性についても言及した。また、これらの①から④に加えて、「特異児童」としての山下清らの作品の反響が戦時下の日本社会において興味深い作用をもたらした点は、彼らの「能力」の発揮に引き寄せられた議論が、イデオ・サヴァンといった心理学・精神医学用語などでその位置づけを確保する中で、「能力主義」によって一定の人間を排除する優生議論に揺さぶりをかける、「低能児」の「天才」の実例として、ある種の「抵抗」のような姿をもみせたということでもある。

今後の課題としては、ここで明らかになった「特異児童作品」の孕んだ問題を、日本近代の美術に関わる問題として考えていくために、さらに昭和10年代の「美術側」における否定の言説とも合わせて考えていく必要がある。尚、本文中では、今日では差別的である表現・用語について、本論稿の対象とする時代に使用されていたものとして考察するために、そのまま使用したことをここに断っておきたい。